

第二次世界大戦下、南太平洋の孤島で 「ハンセン病者集団虐殺事件」はなぜ起きたのか

The Wartime Massacre of Lepers in Nauru

岡村 徹

公立小松大学

1. はじめに

ナウル島は赤道の南約 50km の南緯 0 度 31 分、東経 166 度 56 分、面積は 21 平方キロ。歴史的には、1888 年独が保護領化、1942 年 8 月日本軍占領、戦後は英、豪、NZ 三か国信託統治下、1968 年独立。主要な経済は燐鉱石の輸出、人口は約 1 万人。

2. 事件資料

これまで様々な研究者が当該事件の発生した時期、犠牲者の人数、殺害方法、事件が起きた背景について言及してきた。例えば、Ridgeway (1948)、Shaw (1967)、石川二 (1980)、Pollock (1991)、Garrett (1996)、神谷 (私信)、内田 (2006)、岡村 (2008)、林 (2008)、ナウル政府 (2009) など枚挙にいとまがない。その中で林 (2008) は、豪州国立公文書館において、ナウル島民の虐殺された場面の詳細な再現資料を発見した。

3. 第 67 警備隊と旧南拓社員の証言

東京に開設された、第二戦争犯罪局では、元第 67 警備隊員や元南拓社員らが豪州人捜査官に呼ばれ、それぞれ証言をした。例えば、元二曹は「神州丸はらい患者たちを乗せたボートを曳航してヤルー島へ向かいました。船長は、水夫長に曳航しているロープを切断するよう命じました。私は五発連続して砲撃しました。他の乗組員と一緒に二、三発は撃つように命令されていたので、そうしました。命令だったのでほかにもどうしようもありませんでした」と証言した（歴史的な資料につき、公文書のまま記した。岡村 2015 : 112）。類似の証言が他にも多くなされたため、ついに事件の実質的な命令者とされた、元副隊長は言い逃れができなくなり、1946 年 5 月に死刑判決が言い渡された。そして、同年 8 月にラバウルで死刑が執行された。

元南拓社員の石川好雄は、警戒船船長の銃殺までの直接談を、ナウルの中華街で船長から聞き、

その情報を占領軍に提供している。また、上級士官のリストも提出しており、ナウルの埠頭で、殺害計画を知らされないまま患者を見送っており、第 67 警備隊の上層部に騙されたことに対する反発と嫌悪感がうかがえる。

しかしながら、保身のために自ら積極的に裁判で証言した可能性も残る。ナウル島での自分の行動が豪州軍に曲解され、自分が不利な立場に追い込まれる可能性もあったと考え、占領軍に積極的に証言したとするものである。石川は患者らを、埠頭で見送っている。彼は患者のリストを持っており、患者に一番近い立場の人間であった。

4. おわりに

当該事件は、日本兵への感染を恐れたために発生した。「ハンセン病患者集団虐殺事件」の全容が十分に解明されないまま、豪州軍は拙速な判断をとったのも事実である。この事件は、ほとんど表に出ることはなく、ハンセン病の理解も不十分なまま蓋をされた。その後、九十年に及ぶ国の隔離政策と国民一人ひとりの無関心によって、回復者への差別意識が温存された。2003年に起きた、アイレディース宮殿黒川温泉ホテル（熊本県）がハンセン病元患者の宿泊を拒否、その後ホテルが自主的に廃業したのは記憶に新しい。無関心は差別を助長、固定化する。まずは他者を知ることから始めよう。

本稿は、2020年6月20日から7月19日までに行われた全5回分の公開講座「世界を知る：今なぜ異文化理解なのか」のうち、7月12日の第3回講演「第二次世界大戦下、南太平洋の孤島で「ハンセン病患者集団虐殺事件」はなぜ起きたのか」を、講演者の手によりまとめたものである。